

作物名：いちご

病害虫名：灰色かび病（病原：*Botrytis cinerea*）



果実の病徴



果梗の病徴

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・主に果実に発生するが、花卉や葉、葉柄、果梗など地上部のあらゆる組織を侵す。
- ・果実では特に収穫期に近い成熟果が発病しやすく、初め暗褐色の病斑を生じ、しだいに拡大し果実を軟化腐敗させ、湿度が高いと全体に灰色のかびを密生する。
- ・果梗、葉柄には暗褐色の病斑を生じ、病勢が進展すると多湿時には灰色のかびを密生する。

2 伝染源及び伝染方法

- ・本病菌は被害植物で分生子、菌糸の形または土中で菌核の形で生存し伝染源となる。病斑上に形成される分生子が空气中に飛散して伝染を繰り返す。
- ・本病菌は傷口や枯死した部分から侵入するため、老化葉や枯死葉などは初期の寄生部位となり有力な伝染源となる。果実では、初め枯死した花卉や雌しべの柱頭に寄生し、果肉へ拡大する。

3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は糸状菌の一種で不完全菌類に属し、菌の生育温度は最低2℃、最高31℃で、適温は20～23℃である。また、多犯性でいちごの他にもきゅうりやトマトなど多くの野菜、花き類や果樹類に寄生する。
- ・分生子の飛散は曇雨天のときに多く、多湿条件で多量の分生子を形成する。施設栽培では曇雨天が続くと、ハウス内が多湿となりまん延する。

4 防除対策

- ・発病果に形成された分生子が二次伝染源となるので、発病果はみつけしだい取り除き、ほ場外へ持ち出して処分する。
- ・株が混み合わないよう不用な下葉は整理し通風を良くする。
- ・ハウス内が多湿にならないよう換気を行う。
- ・薬剤散布は発生初期のうちに予防的に行うとともに、上記の対策を併せて実施する。

※ 薬剤防除にあたっては耐性菌の発生を防止するため、同一系統薬剤の連用は避け、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。特に QoI 剤及び SDHI 剤は、耐性菌の発生リスクが高いため、それぞれ単剤で使用する場合は1作1回まで、効果が期待できる他成分を含む薬剤との混用の場合は1作2回までとする（下記ガイドライン参照）。

5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）、農業総覧原色病害虫診断防除編2-②（農文協）、野菜・果樹・茶における QoI 剤及び SDHI 剤使用ガイドライン（日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会 <http://www.taiseikin.jp/guidelines/>）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影